

今後の児童生徒質問調査の 一部分冊／ランダム方式での実施について

1. 令和7年度生徒質問調査へのランダム方式の導入
2. 令和8年度以降の児童生徒質問調査へのランダム方式の導入
（参考）令和7年度児童生徒質問調査項目

1. 令和7年度生徒質問調査へのランダム方式の導入

ランダム方式を導入して

「令和7年度全国学力・学習状況調査の結果（概要）」p.61

- PISA の生徒質問調査では、「構成内マトリックスサンプリング法」（ある大問について全小問ではなく一部の小問のみランダムに生徒に回答させる手法）が採用されている。例えば、PISA2022 では、コロナによる休校期間中の学習について問う大問中、デジタル機器の使用、学習環境などに関する8つの小問があり、個々の生徒にはその中から5つの小問がランダムに質問された。
- 令和7年度の生徒質問においては、一人一人の指導に生かすための項目を引き続き悉皆調査としつつ、全体の傾向を把握するための項目の一部について、MEXCBTの機能を活用して「ランダム方式」が試行された。具体的には、16項目に「ランダム方式」を採用し、ランダムに選ばれた5問のみを生徒が回答する形がとられ、例えば、p.59に結果を掲載した生徒質問(30-1)～(30-7)の7問中2問に回答してもらった。
- 「全国学力・学習状況調査の調査結果の取扱いの改善の方向性」（令和7年6月6日全国的な学力調査に関する専門家会議・調査結果の取扱い検討ワーキンググループ）において、「令和8年度以降の調査においても、このようなランダム方式を活用して効率的・効果的に質問調査を実施することについて、更なる検討を進めるべきである」とされている。
- 今回、調査及び分析は滞りなく実施できたが、ランダム方式の更なる活用に向けた検討を進めるに当たって、以下の2点に留意する必要がある。
 - 1点目は教育委員会や学校への結果提供の方法についてである。今回ランダム方式を採用した項目については、全体の傾向を把握することを主目的としていることも踏まえ、学校、教育委員会ごとの集計・返却は行わず、報告書に国全体の傾向を掲載する取扱いとしている。ランダム方式を採用した質問項目の回答結果について、学校や教育委員会における活用可能性をさらに検討する必要があるだろう。
 - 2点目はランダム方式で実施することによる影響の有無の検証である。今回、ランダム方式で実施した質問について、国全体の傾向が分かるデータを取得できたと考えられる一方、(30-1)～(30-7)では全体的に「とてもそう思う」と回答した割合が昨年度の同じ質問よりも減少した。従来通りの悉皆調査で実施した小学校の結果との比較などを通じて、ランダム方式の影響を見極める必要がある。

（参考）ランダム方式で実施した生徒質問調査の結果については、「令和7年度全国学力・学習状況調査報告書（質問調査）」に掲載している。

☞ <https://www.nier.go.jp/kaihatu/zenkokugakuryoku.html>

1. 令和7年度生徒質問調査へのランダム方式の導入

<ランダム方式の項目のセレクションについて>

令和7年度生徒質問調査において、ランダム方式の項目の出題率は概ね均一に分散しており、**機能上、問題はなかった**と考えている。

(例) ランダム方式で出題された72-1～72-5の回答生徒数、回答傾向は、それぞれ以下のとおりであった。

※上段は生徒数、下段は生徒数の割合(%)

質問番号	質問事項	選択肢				無回答	合計
		1	2	3	4		
(72-1)	1、2年生のときに受けた授業では、英語を聞いて（一文一文ではなく全体の）概要や要点をとらえる活動が行われていたと思いますか	114,344人 31.5%	180,388人 49.7%	51,180人 14.1%	16,003人 4.4%	676人 0.2%	362,591人
(72-2)	1、2年生のときに受けた授業では、英語を読んで（一文一文ではなく全体の）概要や要点をとらえる活動が行われていたと思いますか	119,278人 33.0%	176,670人 48.8%	49,372人 13.6%	15,919人 4.4%	714人 0.2%	361,953人
(72-3)	1、2年生のときに受けた授業では、原稿などの準備をすることなく、（即興で）自分の考えや気持ちなどを英語で伝え合う活動が行われていたと思いますか	70,447人 19.5%	146,052人 40.4%	106,870人 29.6%	37,505人 10.4%	706人 0.2%	361,580人
(72-4)	1、2年生のときに受けた授業では、スピーチやプレゼンテーションなど、まとまった内容を英語で発表する活動が行われていたと思いますか	138,780人 38.3%	153,660人 42.4%	51,490人 14.2%	17,403人 4.8%	726人 0.2%	362,059人
(72-5)	1、2年生のときに受けた授業では、自分の考えや気持ちなどを英語で書く活動が行われていたと思いますか	141,679人 39.3%	162,110人 45.0%	43,091人 11.9%	13,055人 3.6%	670人 0.2%	360,605人

<ランダム方式の項目の結果返却について>

令和7年度生徒質問調査において、ランダム方式の項目の結果については、教育委員会・学校に対して提供している回答結果集計データには含まれていない。

今後の結果返却の在り方については、令和7年度「学力調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究

（C. CBT 導入後の質問調査の設計・実施に関する試行・検証）」において検討中。

1. 令和7年度生徒質問調査へのランダム方式の導入

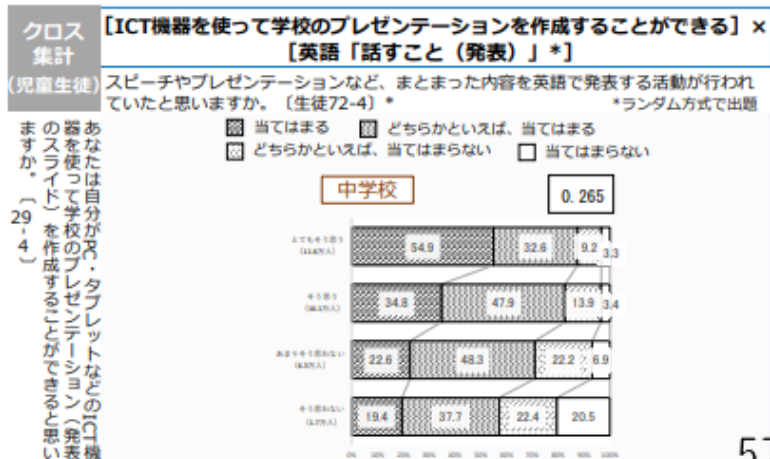
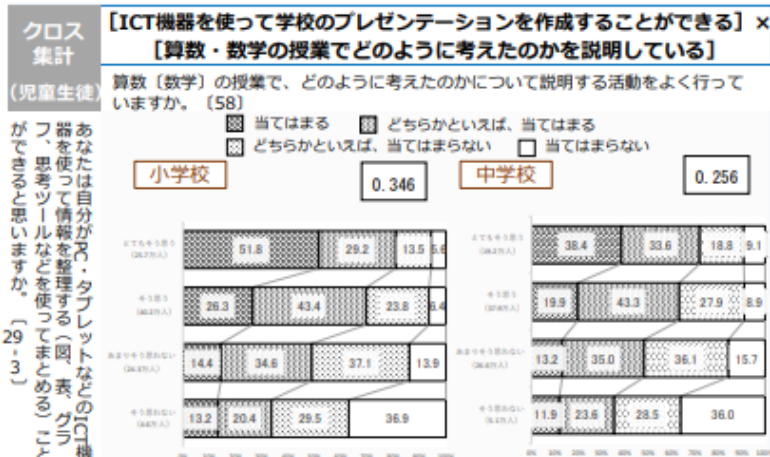
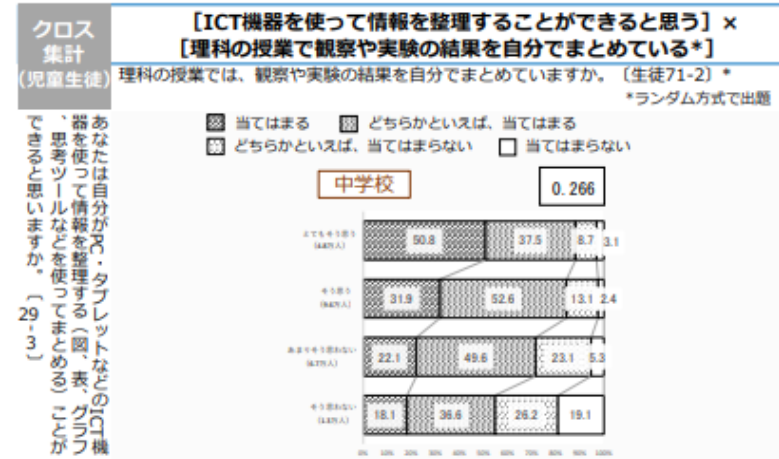
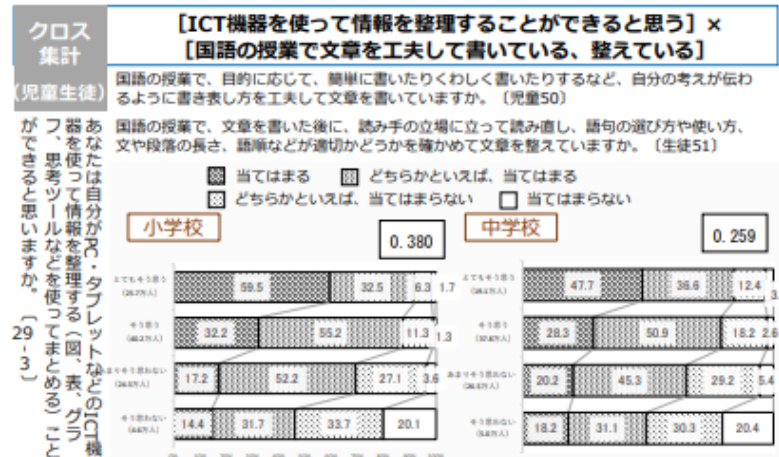
<ランダム方式の項目の結果分析（クロス集計）について>

統計上、問題なく分析できたと考えている。

「令和7年度全国学力・学習状況調査の結果（概要）」p.57

ICTを活用する自信×各教科における学び

○ ICT機器を活用する自信がある児童生徒ほど、各教科で自分の考えを工夫してまとめたり発表したりする活動に取り組んでいた傾向が見られる。



質問72は5項目中2問ランダム方式で出題されたので、児童生徒のサンプル数は40%となった。仮に、質問29が4項目中1項目ランダム方式で出題するとすると、質問72と29のクロス集計を行う、全体のサンプル数は10%程度となる。10%程度であっても、サンプル数は十分多いため、統計上、問題なく分析できたと考えている。

2. 令和8年度以降の児童生徒質問調査へのランダム方式の導入

教科調査にCBT-IRT（分冊方式）を導入するのを機に、児童生徒質問調査の既存の質問項目を

目的①：児童生徒一人一人の指導に生かすための質問項目

（＝悉皆で調査すべき）

目的②：国全体の傾向を把握し、政策形成に生かすための質問項目

（＝分冊・ランダムでも調査目的は達成可）

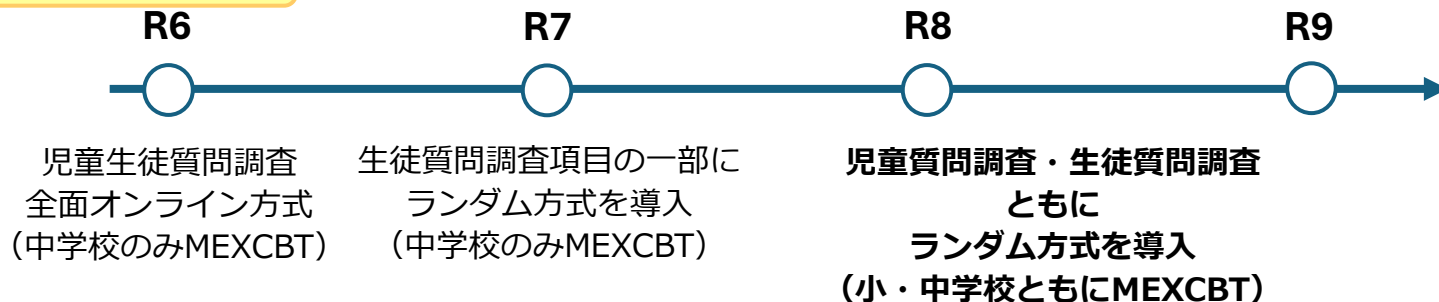
のように目的に応じて整理し、**②のみ分冊方式又はランダム方式で実施する**方向で検討。

全国学力・学習状況調査（悉皆調査）のCBT化スケジュール

教科調査



質問調査

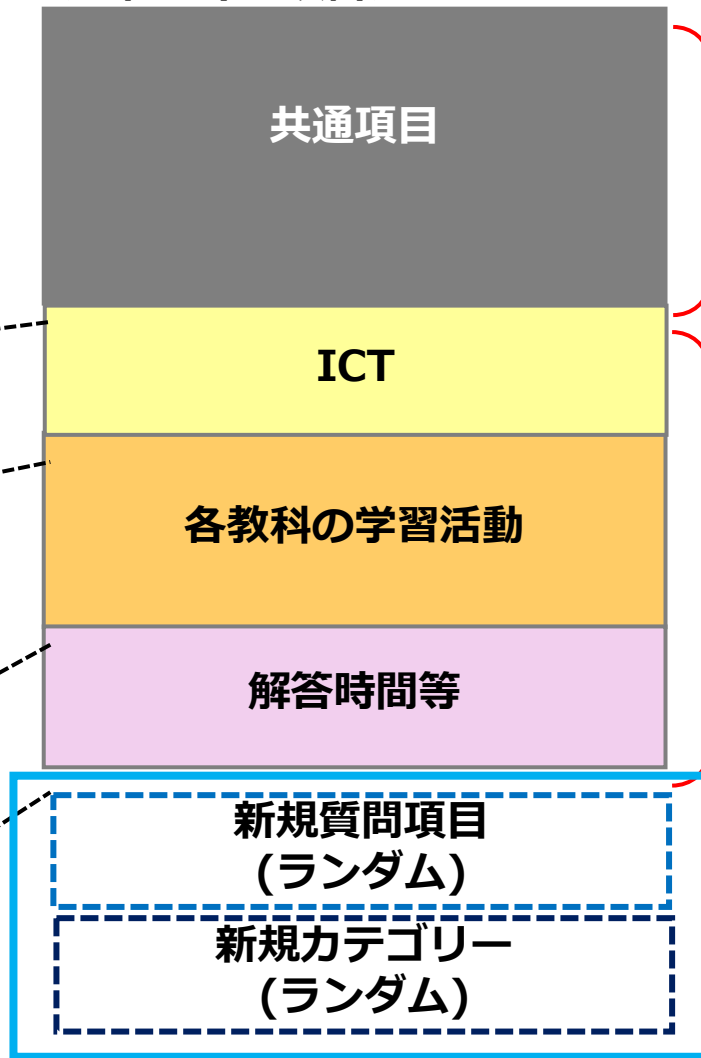


2. 令和8年度以降の児童生徒質問調査へのランダム方式の導入

<令和7年度生徒質問調査>



<令和8年度以降>



目的②の質問や、
2,3年に1度の質問
の一部にランダム
方式の導入を検討

ランダム方式の拡
大を検討。
毎年の調査も可能
となる。

新規項目・カテゴリー例

- ・心理尺度
- ・社会調査指標(SES含む)
- ・トレンド
- ・隔年出題項目

等

(参考) 令和7年度児童生徒質問調査項目

現在使用されている質問項目について、目的①②のいずれで使用しているかを整理した。

目的①：児童生徒一人一人の指導に生かすための質問項目（＝悉皆で調査すべき）

目的②：国全体の傾向を把握し、政策形成に生かすための質問項目（＝ランダムでも調査目的は達成可）

※中学校のみ「基本的生活習慣等」の項目と「学習に対する興味・関心や授業の理解度等（各教科）の理科」の項目とあわせて4項目中から1項目ランダムで回答。

＜令和7年度調査の質問項目と目的＞

	設問数 (R7)	ランダム (生徒質問)	設問総数	目的① で活用	目的② で活用	悉皆の 必要性
基本的生活習慣等	5	1/4※	5	○	○	高
挑戦心・達成感・規範意識・自己有用感	11	0	11	○	○	高
学習習慣、学習環境	9	0	9	○	○	高
地域や社会に関わる活動の状況等	3	0	3	○	○	高
ICTを活用した学習状況等	12(小) 7(中)	2/7	12	▲	○	低
主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況	9	0	9	○	○	高
総合的な学習の時間、学級活動、特別の教科道徳	4	0	4	▲	○	低
学習に対する興味・関心や授業の理解度等（各教科）	27(小) 30(中)	理 1/4※ 英 2/5	27(小) 32(中)	○	○	高
各教科に関する調査の解答状況（解答時間等）	6(小) 5(中)	1/4	6(小) 8(中)	▲	○	低

現在使用されている質問項目のうち、**悉皆の必要性が高いもの：64(小)、67項目(中)**
悉皆の必要性が低いもの：22(小)、16項目(中)